

雪の町で

タカハシ ユキオ

「ノリツケ ハダコデ シヤツキドセ」

仲間の発する掛けコトバを、まだ体内消化出来ないためか、異国とも思えるフレーズがリフレインとなつて頭の中を行ったり来たりする。しきりに、しゃつきりとしろと。

夕べの深酔いから冷めつつ、引き戻されつしながら、夢とも現実とも区別出来ない中にまだ居る。まだまだ、酔っ払いの最中である。白襟の掛かる黒木綿の布団を、半ばめぐり上げ、左足を畳に放り出し、幾らかでも酔いを冷まそうとする。だが、酔いから発する熱氣や妄想はおさまらない。ひどく左の頭の先で痛みを覚える、しきりに喉が渇く。何を呑んだのか、どれだけ呑んだのか、どうやって帰ってきたのかも、当然のように定かではない、思い出せない。

濡れ手ぬぐいをあてがうように腕を額の上に乗せると、また浅い眠りに引き戻されていく。そして別の世界に身を委ねる。ひどく近く、夢なる別世界と現実の境目がまだら模様

だ。歳を取るとともに、夢と言う世界の方がより現実的に思えることが多い。夢と言っても、登場するのは懐かしい家族や故郷の風景、暮らした場面がそのほとんどで、多く登場するからである。それは、何が起こるか分からないこの先の事より、確かに自分にとっては別世界に出てくる関係性や状況がめちやくちやだが、夢だから現実離れしているのだが、素直に受け入れやすい話でもある。その境目がかなり怪しくなっていて来ているのだ。

雪の中、父の馬そりに乗って、堆肥出しの光景だ。春嵐で周りには地面から雪が起き、雪原となっっている田んぼを飛び去る。父の背とその先のカルハナの二つ並んだ耳が、鞍越しにかすかに見えたような気がした。ホーホーと、カルハナを操る父の掛け声、鞍の鈴音が地吹雪に巻かれ、掻き消されながらも何やらそれとは違う音が混じる。ガラス戸を揺する、叩く音のようでもあるが、それがどこで叩くのか、誰が叩くのか、何の用事があって呼ぶ

合図なのか、なかなか識別がつかないまま、意識が萎えて再び記憶が途絶えた。

「センセエー、センセエー」

と、しきりに呼ぶ女の声がする。その声には聞き覚えがあり、私を呼び起こそうとしていることに幾分回り道したが、やっと気がついた。すでに寢床の周りには、氷点下近くにも下がった冷気が漂っているが、依然頭がぼんやりして、体が妙にほてっている。寢床に居ながら、少し待てと、玄関先に向けて返事を投げてやる。ジャージのズボンを壁に寄りかかり、やっとの事で足を通し、勝手場を抜けて玄関の小上がりに辿り着く。サンダルを引っかけ、ガタピシの格子状のガラス戸を開けようとするが、既にレールは赤錆びて一気には開かぬ。結露でぼんやり曇ったガラスの向こうに女の影が見える。女と両側から呼吸を合わせ、やっとのことで玄関戸が開く。二人の息が重なりあい、表の雪を這い冷気が足元に

一気に流れ込むと同時に、玄関の中につんのめるように、

「イギデルンシガ」

と、女にしては乱暴なコトバを投げつけてくる。私を確認して安堵したのか、女は立て続けに用件を伝える。

「センセエーモ、ナンボガヤツテミグラ」

天気も良いし側溝に水を流す日だから、雪払いをやってみたらと。今日は隣近所総出で雪下ろしやら、雪掻きらしい。女の突然とも、一方的な指図に圧倒される。女に今朝方も戸を叩き、起こしに来なかったかと聞くと、センセエーが夕べ歓迎会だった事を知っていて、そんな朝早くになど起こしに来ないと。

寒さに身を丸め欠伸をしながら、すでに路に立ち去る防寒着で着ぶくれした女の後ろ姿に、朝方の訪問者を訝しく思いながら、後で準備して行くからと、言葉を投げてやった。

玄関戸を足で蹴りながら閉め、勝手場の流

し場、洗面器に溜めてあつた水に歯ブラシを差し込み、濡らす。薄氷が周りに付着し解け始めている。歯磨きをしながら、六畳間の寝部屋の隣、四畳半の居間の旧型のテレビを点ける。なかなか映るまで時間が掛かる。当然地デジではない、旧式のまま、そんな事で受信料なんぞは知らない。掛け布団と敷き布団を一緒にして丸め込み、押入れの前に押しつける。さらにその上に枕を載せ置く。居間の電気炬燵のピンク色の天板に、やけに白いだけの障子から、表戸の縦格子を映し出し、すでに昼時近いと思われる日差しが届く。

やっと色調がやけに強い画面に、昼時前の地方局の番組があれやこれやと土地の話題を流す。今日の秋田の天気は、久しぶりに快晴のようだ。まだ、体は宙に浮くような感じもするが、叩き起こされた女の手前もあるし、そこらにあるものをとりあえず着込み、厚手の靴下も重ね、少しだけダブダブな膝までの長靴を履き込む。この土地では長靴が必需品

なのだ。名ばかりの下駄箱の脇に立て掛けてある雪べらを持ち出し、玄関先に立った。

真冬とは思えない日差しが、隣家との屋根の隙間、頭上から注ぎ落ち、薄雲がしきりに東へ東へと流されて行く。緩やかにふっくらと弧を描く雪とその影が作る陰影に、少しめまいを感じながら路に踏み出す。山となって路にはみ出した雪を、蓋を外した側溝に運び、投げ込む隣人たちの姿で賑わっている。側溝で処理出来ない場所の雪は、荷台に側板を取り付けた軽トラが雪を満載にして雪捨て場を往復する。

先に玄関先に積もっている雪を片付け、軒先に丸まり、垂れ掛かっている雪を下から突き落とす。下手な落とし方をすると、自分が雪溜まりに埋もれてしまいそうだ。

「センセエー、オオナンギダンシナ」

雪は上の方から下ろすのが鉄則と、二度手間の作業を見て、路を往く人たちはお疲れ様とともに声を掛けていく。少しは一緒になっ

て手伝わねばと、みんなが精出す近くに加わる。すでに朝からの作業であるらしく、屋根に一メートル程積もっていた雪は降るされ、路上に溜まったその後始末に取り掛かっている。この路は、本町の南裏通りにあたり、小さな町を横切る西馬音内川の川沿いにある。

「ガオルシ、イデアグスルガラキツケレ」

慣れないことを無理するなど、毎年雪下ろしで死人が出ると言い、隣人たちは、私の加勢をまったく当てにしない素振りである。だが、女が呼びに来たのは、雪の片付けは地域みんなでやるもの、隣近所の関係性を良好に保つ、大切な作業の一つなのだろうとも思っていた。ただ、空き家となった建物では、遠くに居ても人夫を頼んで雪を下ろしてもらうか、さもなければ雪の重みで崩壊するままにするしかない。えらくお金が掛かる豪雪地帯の暮らしである。

少し体を動かし、汗したせい、宙に浮き

そうであつた体も、だいぶ地に着いて来た。勢いよく雪を溶かし込み、流れる側溝を見ながら、夕べのことが少しずつ確認出来た。

夕べ、赤い太鼓橋の二万石橋を渡つた。

川向かいの橋場、その通りから外れた路地、「小春」という名のスナックなのか居酒屋なのか分からぬ店で仲間と飲んだ。仲間は、この店の女主人の事を小春おばさんと言ひ聳肩にしている。歳は同世代のようで、今も熱狂的にファンがいる松尾和子似と言へば、

「シタゴドニヤ」

と、仲間から否定されるだろうが、秋田美人に違いない。そういえば「小春おばさんの家は北風が通り過ぎた小さな田舎町どうのこうの」という歌があつたが、今にも雪に埋もれそうな店先の看板になぜか愛着を感じるものがあつた。十人も入れれば満員御礼の小さな店である。誰かが言うのを聞いたような気もするが、先代の女主人から店の名前もそのままにして譲り受けたらしい。

「センセエーノ、カンゲイカイダンベ」

「ササ、ノムベ、ノムベ」

と、飲み会が始まったのが七時半過ぎ。メンバーが揃ったのは八時をとつくに回った頃だ。狭い木製の年季の入ったカウンターを脇に、多少なりともシックな内装にいくつかの灯具がぶら下がる、その奥の角のボックス席で始まった。遅れてやって来るメンバー、その度に乾杯が繰り返され、泡のリングを残したジョッキが空になりカウンターに返される。

最後に顔を出した木村呉服店の聡ちゃんが、9
「ケイチヤン、アンベワリド」

との報告があり、結果、男同士の飲み会となった。聡ちゃんは口元に髭をたくわえ、いつも手ぬぐいを首に巻いている。呉服店オリジナルの藍染め手ぬぐいである。恵ちゃんとは、私を叩き起こしに来た女・柴田恵である。

この仲間の会は、この小さな町でもっとも全国的に知られている「西馬音内盆踊り」を町外に積極的に紹介しようと、盆踊り保存会

とは別に作った「北の盆」という同好会的なグループである。囃子方は盆踊り保存会に属さず、独自の活動を行っているが、踊り手は盆踊り保存会に入っている人たちも多い。グループの活動の成果もあり、夏の本番の盆踊りをずいぶん遠くから観に来る観光客が、急激に増えているとの事だ。

「オナゴツケネクテ、ワリツスナ」

女っ気がなくてと、グループの代表を務める今野洋装店の正太郎がしきりに謝る。私と学年が違うが同じ昭和二十五年生まれでもある。正太郎は、みんなに「正ちゃん」と呼ばれ、グループの育ての親であり、三十年前程から仲間を作り、一から囃子を教え、牽引している存在である。若い頃より無類の音楽好きで、盆踊りの篠笛はもちろん、あらゆる楽器やシンセサイザーを操り、この他に音楽グループを率いての活動や有名ミュージシャンとの共演もしている。

「マンツ、コンタナノミヤツコダノモ」

場末の店で、いや婆様の店で申し訳ないと、サブリーダー的、正太郎の補佐役でもある佐藤晴吉が一気に場を盛り上げに掛かる。グループのみんなはお互い「ちゃん」付けだが、晴ちゃんはこのグループのボーカルであり、この町ただ一店のお土産専門店の店主である。西馬音内盆踊りのボーカルと言えば、当然一目おかざるを得ない。今の若い人たちでは到底真似の出来ない、土臭さ、特有の方言のなまりが滲み出た地唄に味がある。

晴ちゃんの言いぐさを切り返すように、背を向けたまま調理する女主人が、

「ヤラシグネ、ヤロダチダナ」

「ナシテココデ、アクデヤチグナダ」

口の悪い男たちと、こんなにも長く付き合っ
て来たものだと言い、センセエーとやらも
毒されないようにと、菊ずしの切れっ端を味
見しながらカウンターからコトバを返す。

すると、掛け合い漫才のように、

「イイアンベノガツコダベ」

よく漬かったガツコのようなお袋・あばと、晴ちゃんが切り返す。カウンターを境にしばし土地コトバの応酬合戦が続く。

カウンターの端、その上にはこの店にそぐわぬ大ききのモニターが吊ってある。きつと口の汚い男等にせがまれて、取り付けたのかも知れない。やがてそれぞれがカラオケ歌詞帳を手回しし、めぐり、選曲入力し合い、歌謡ショーならぬ、青春の歌のアルバムへと移行する。メンバーたちは、盆踊りの囃子方や出張公演をこなすせいにか、みんながトーク、カラオケと、話出すと止まらない、歌い出すと嫌と言うほど延々と続く。歌はどうゆう事か、コトバが言葉となつてすんなり耳に入ってくる。小春おばさんの店は、女主人も結構上手いらしく、この土地の歌謡道場となつてゐるのだ。こんな仲間の中に私を受け入れてくれたことが、何よりも嬉しい事であつた。

一番歳かきの時計屋の高橋政司、政ちゃん

がテーブルを叩き出す。太鼓のパーツなのでバチのない時は、ありとあらゆるテーブルを叩く。ボーカルの晴ちゃんは、鉦の代わりにビール瓶を栓抜きで叩き、拍子を取りながら唄う。グループが他所に呼ばれて公演がはねてからのご苦労会では、いつもの光景なのであろう。夕べも十二時が過ぎる頃、このパフォーマンスは始まった。その音頭が心地よく、「ノリツケ ハダコデ シャツキドセ」の掛けコトバにも拘わらず、にわかには眠気が誘った。それからの事は、やはり思い出せない。

「デイジヨウブダベカ、センセエー」

と、体を揺さぶる女主人、豊満な小春おばさんの声がしたような、しないような。

「センセエー、ヒルメシカニヤダガ」

と背後から、女が、いや恵ちゃんが、声を掛けてくる。夕べの曖昧な記憶も途切れた。雪の処理に朝から出ていた隣人たちは、昼飯を摂る時間帯に入ったらしい。今まで使ってい

た雪ベラやスノーダンプ、スコップを山と化した雪山に差し込むなどして、それぞれの家に昼飯を摂りに戻る。私は戻るほど汗した訳でもなく、戻っても用意してあるものもない、第一食べるものがない。当然ながら、まだ夕べの飲み会の二日酔いで、食欲までとはいかない。家の前の側溝辺りの雪を片付ける真似事をする、それしか出来ない。夕べの事もあるので、昼飯どころか、今は断食、何も喉が通らない、食わずとも大丈夫と告げた。正直、まだ胸のつかえが多少残る。この年齢ともなれば、さほどカロリー数のある食事は必要ない。毎日、朝夕二食で充分事足りているのである。

夕べ仲間の会に恵ちゃんが出来なかった事が、木村呉服店の聡ちゃんより報告があったが、「メンバーが残念がっていたよ」と、まだ理由さえ定かでもない話を向けた。玄関先から去って行った時の着ぶくれした格好とは違い、雪掻き作業で汗したのか、その防寒具

を脱ぎ去った恵ちゃんの背格好に半ば見とれながら、この小さな町に辿り着いた、世話をしてくれる女・恵ちゃんに、どうしたのかと問う間もなく、

「ビヤツコナー」

と言う、返事ではない、違うコトバが力なく雪路に吐き出された。

恵ちゃんは、ひと回りほど若い。西馬音内盆踊りの踊り手、正統派を継ぐ女である。ただ、いろんな地元での多々あるだろう事情は聞いていないが、盆踊り保存会の重要な踊り手でもあり、正ちゃんの「北の盆」の踊り手メンバーの頭でもある。背筋が通り、長い髪は、踊り手としてこの土地に生まれ、育って来た存在である事がすぐ見て取れる。その恵ちゃんが、夕べの歓迎会に顔を見せず、先ほどの「ビヤツコナー」と言う、恵ちゃんらしくない返答と言うか、私には、何か言いたい、伝えたい素振りを感じざるを得なかった。

西山に掛かる蒼黒とした雲模様は、今夜から再び降り出す雪を予感させる。払い除けても、払い除けても降り積もる雪。ただ、この土地でも春になると、当然解けてしまいう雪なのだが、そのまま放っておく事は命を危うくもする。今日のように晴れ間を見ては、ひと冬に三、四回程度は雪下ろしをするらしい。

すっかり酔いも冷め、何度か行った事のある裏町の蕎麦屋で、蕎麦の殻を除いた白い部分だけで打ったと言う、土地特有の冷掛け蕎麦をかつ込み夕飯とする。若い夫婦が父母と営んでいる店のようで、盆踊り時期は隣接する料亭のような構えの建物で、宿泊も出来ると言う事だ。

「センセエー、ユギコサナレダガ」

この土地の雪に慣れたか、これでも今年は少ない方だと、なぜか若主人もセンセエーと呼ぶ。夕方定時の地元局、明日からの週間天気を知らせるが、再び雪マークが続くようだ。盆踊り会場となる篝火広場、本町通りを突っ

切り仮の住み処に戻る。

夕べと今日の疲れも重なり、丸めて置いた布団をそのまま開き、大の字になって寝た。ただ、恵ちゃんの「ビヤッコナー」と言う、いつもは快活で他の者への気配りのいい、姉御肌の恵ちゃんにしては、かなりくすんでいる事が気掛かりであった。

昨日の天気予報通り、雪空に戻る。

少しずつ雪の形状は日ごと変わって来ているようだが、電灯を点けなければ部屋に閉じこもって居られない。晴ちゃんのお古のどんぶくを着て炬燵にもぐり込む。これまた晴ちゃんやんがセンセエーの勉強のためにと持って来た土地の書物やら、紹介が載った冊子を、暇潰しにめくってみる事にする。

みんながセンセエーと呼ぶ事になった理由はたいした事ではない。多くの人は見かけや言葉づかいでその人をイメージづけるらしい。それは、自分が思う内面とは随分違うもので、

あくまで他人が思う、感じるイメージが一人歩きしているのが現実である。だから、仲間には自分と言うものが、こうなんだと言う説明はあえてしていない。

きっかけは、二月初旬、運良く西馬音内盆踊り定期公演が午後から開催されると言うので、表通りに面した会館で踊りを見る事にした。ずっと置き忘れていたような、若い頃湯沢まで来て、まだ当時あった雄勝電鉄に乗り、西方の西馬音内の扉を開ける興味、好奇心を持たなかった、奥羽山脈の果ての郷を、再び確かめたかったからだ。

この公演は月一回、「北の盆」というグループが盆踊りの宣伝のために開催している事を知った。なかなか夏の本番に来て観る事が出来ない人たちへの対応である。会館での観客は時期的に随分少なかった事もあり、まったくの興味本位でグループの面々と直接話をする機会を得た。グループの面々の人なつつつこさも加わり、その時、盆踊りの艶やかな衣

装の事や、まだ何となくしか聴き取れない、理解出来ない土地のコトバ、そして深い雪の中に自分を少しの間置いてみたい、幽閉してみたい、と言う心境になった。いわばゆきずりの恋いならぬ、異邦人ごっこに落ちたのかも知れない。

こんな事がきっかけで、盆踊り会場となる本町の通り、その端の方の旅館に数泊厄介になった。だが、グループのメンバーが私をなぜかどこかの研究者と一方的に勘違いしたようで、「センセエー」と呼ぶようになった。いちいち説明するのも億劫だし、第一そんなにこの土地に長居をする気もない。面倒くさいのでその様にしていくと言う事だ。土地のコトバで、「ンダスナ」と言うコトバがしきりに使われるようだが、肯定でも否定でもない、相づちとも思える曖昧な都合のいいコトバだが、「ンダスナ」の心境でもある。

晴ちゃんが持ち込んだ書物の斜め読みを続

ける。やはり時代を遡ると、江戸時代ほどでないにしても、明治から昭和の戦前に掛けては、土地それぞれの生き死にに直結する出来事がありにも多い。羽後山地の山麓の中に隠里のような土地を得て暮らす名家・鈴木家のような存在と、一方で一生小作農で終える人たちも存在する事である。特に興味を引いたのは、この町の西方地域、田代や仙道と呼ばれる地域のかつての貧困さであり、娘を売らねばならない事が多かったと言う。親の目の前に並べられた五十円、それよりわずかな二十円の現金にひかれて娘を売る。湯沢駅周辺には周旋屋（ひとかい）もあったとか。子を売った親たちが、七曲峠を、真坂峠を泣きつつ咽びつ西馬音内の町まで見送ると言う話にはあまりにもせつなく、悲しい。また、彼女らは山を出てから、たった一本の便りもよこした者がないと。連続的な大凶作に見舞われた昭和の初めから戦前の話である。

二月第三週、週末の夕間暮れ。

「センセエー、オザタンシガア」

と、晴ちゃんの声がする。玄関に出ずとも、さっさと玄関戸を開けて上がり込んで来る。

「マダ、バンゲノメシ、カッテネスべ」

手に酒の肴を入れたビニール包み、左脇に一升瓶を抱えている。どっかと炬燵の上に置き、ずれ落ちた靴下をはき直し、炬燵に足と手を突っ込む。家庭教師のように、

「ケンキュウ、ハカドツテダスペカ」

「ナンタツテ、ナンモネー、ニシモニヤ（西馬音内）ダガラナ」

と、いつもながらの冗談を飛ばし、ビニール包みを早速ほどき、流し場へ湯飲みを取りに行く。この土地の、いや仲間たちだけかも知れないが、このように人の都合に一向に頓着せず、見事に鍋釜下げた押し掛け女房のように、私の内に入って来る。そして、気持ちを驚ぶかみしてみせる。

この二軒長屋の世話をしてくれたのも、晴

ちやんと恵ちゃんである。もういつ壊されるか分からない、当然誰も入っていない長屋だから、少しぐらいの期間であれば別に問題ないだろう。他所の旅館に比べれば高くはないけれど、いつまでも旅館暮らしと言うのも金が掛かるだろう。第一、この土地の研究をするのなら、もっと土地の普段着の暮らしをしてみないと、本当の事は分からないだろうとも。二間と勝手場、便所、風呂場はあるが風呂桶がない。プロパンガスも外されているが、電気だけ使えるようにすれば、何とか暮らしにいけるだろうと。ただし、火事にはならないようにと、消防団長の晴ちゃんはそうなるかと困ると真顔で言う。布団は恵ちゃんが使っていないものを、テレビと電気炬燵は電気屋の政ちゃんが処分する予定であった廃棄物の山から拾い修理してくれた。破れ掛けていた障子も手先の器用な聡ちゃんが貼り替え、障子だけがやけに浮いて見える。食器やかんはどこからか集めて来たようで揃った。毎日

の食事は、すぐ近くのスーパーで充分、それも値段がめっぽう安い。地の食材、総菜も揃っているから大丈夫と、恵ちゃんが太鼓判を押す。こうして小さな町でのセンセエー暮らしが始まったのだった。だが、半月経って「センセエー」と言う呼ばれ方を放任している事に、仲間の一途な世話に、少し後ろめたさも覚え始めている。

湯飲みが二杯、三杯と進む。

「コレカスベ、コツツボダツコ。ゴツツオダベ。カドノコンブマキモケ」

と、休む暇もない速度で酒と肴を勧める。何しろ晴ちゃん得意の、自分の店の賞味期限間際のオンパレードである。そして、今日の酒は「若返り」純米酒である。湯沢の酒蔵のものらしく、あきたこまちの旨味をそのまま酒にした爽やかな酒だと。昔は、若返り酒造と言う酒蔵がこの小さな町で唯一の醸造元であったが、平成に入って間もなく廃業。現在、

隣の湯沢市の酒蔵で、西馬音内盆踊りのラベルの銘柄酒として名を残していると、手を広げて講釈する。

「ワカガエリソーダベ」

「ヤツパス、アギダノサケツコ、ウメヤベ」

晴ちゃんの話聞くまでもなく、雪深い町の酒はどこか透明感があり、それでいて情け深い人情味のようなコクがある。降り積もった雪がゆっくり、じんわりと酒になったようでもある。

昼間、斜め読みした盆踊りの地唄の中で「お盆恋しや かがり火恋し まして踊り子 なお恋し」と言う作詞をした矢野泰助の事を聞いてみる。西馬音内盆踊りのがんげ中の地口でもよく知られているものようだ。昭和六年の作で、矢野は当時三十一歳。音頭の部門でも一等賞を得ていると。だが二年後、貧困な小作農の一家の犠牲として身売りされて来たであろう十代の酌婦と、悲恋の心中をとげたと。

「センセエー、ロマンチストダナツス」

その事は、聞くも哀れ、話すも悲しい、この町ではみんな知っている話で、ずっと胸の奥に仕舞って来た事だと。当然、晴ちゃんの生まれる前の事件なのだが、自分が見て来たような、その事件の状況を話して聞かせる。今の役場周辺にあった倉庫だとか、まだまだ地理に不確かな私には分からない話も混じる。葬式やその後の親族の顛末など、小さな町がずっとまるで身内の事のように仕舞い込んで来たのが何となく伝わる。

まだ良く知らないグループのメンバーの話も当然ながら出る。

「センセエー、ドデンスルガモ」

と前置きしながら、この町も、この通りも高齢化がひどく進み、商売を続ける店はほんの少しになったと。今となっては若くないグループのメンバーたちが、中心となって町中を元気づけている様子なのだ。そして、メンバ

ーのほとんどが、一度は外に出て、結局家業を受け継がねばならないので、戻って来たのだと言う。晴ちゃんも首都圏に出たが、結婚を機にやはり戻りこの地で商売を継いだ。

ところが若くして奥さんを亡くし、三人の子供を育てたと言うから、頭が下がる。子供相手の店で、インベーダーゲームが流行った頃は、向かいに店を借り従業員を雇って商売が出来た。しかし、今は子供だまし程度の商品と、いつ来るか分からない観光客向けのお土産品、イベントへの出張販売でなんとかやっているようだ。

正ちゃんも東京から嫁を連れて戻って来たのは良かったが、その後この土地に刺激がなかったのか、自分の思い通りに行かなかったのか、塞ぎ込むことが多かったとか。いつも東京の方を向いて溜息をついていたが、「北の盆」を立ち上げようとする頃、やっと元気になったようだ。この土地でやって行こうと言う踏ん切りが付いたのかも知れないと。

正ちゃんの家では、嫁さんも姑さんからずいぶん可愛いがられたから、それもいい方向に進んだのではないかと付け加えた。

「シヤベレバ、イツペアアルスナ」

話出すと山ほどあると言う晴ちゃんに、恵ちゃんも、やっぱり出戻りなのか、こちらから聞いてみた。出戻りというより親を看なければならぬ、そして東京で一人で娘を育てるのも大変なので、娘の有里を連れて戻って来たとの事である。恵ちゃんもこの土地に取り憑かれた女なのかも知れないとも言う。戻ってからは、通り裏、諏訪神社の向かい、学校橋のたもとで、自分の趣味を活かした小さな雑貨屋をずっと営んでいる。

今夜も時計が十二時を回る。センセエーに授業料払ってもらねば。三日三晩話しても尽きない話っこよと、晴ちゃんはまたもや冗談を飛ばし、帰ると言う。

「ンダバ、ドヤク」

私同様の膝までの長靴を履き、茶色の毛糸

の帽子を被り、私に仲間と言って、ひっそりとした表に出て行く。すでに雪は一尺以上降り積もり、スーパーの駐車場の水銀灯の明かりを斜めに舞う。その明かりを頼りに、深い足跡を残しながら、多少よろけ気味に帰って行った。

この土地の仲間たちは、それぞれに人に語り尽くせない苦労や悩み、そして悲しみを抱えながら、こんなに雪深い中でもそんな素振りには仕舞い込み、楽しく、快活に暮らしている。そんな様子が晴ちゃんに伝わった。雪は今夜もしきりに降り続ける。かまくらにもぐるよう、また黒木綿の布団に入り込む。若い時からずっと抱いていた、ただ重っ苦しく、ただ暗いだけのイメージの土地が、少しずつ解きほぐされて行くような気がし、そのまま眠りに落ちた。

それから数日したこれも夕刻。

ホームヘルパーのように、頼んでもいない

のに今日も誰かの訪問である。

「センサー、オダタンシガア」

アルミ手鍋を両手に抱え、エプロン姿の恵ちゃんが上がり込んで来る。決して大したものではないがと言い、それでも鍋の蓋を開けてみせる。

「タベテケレ、アバノニシメ」

飴色に煮込まれた数種類の具が旨そうに顔を出す。おそらくこのおでんも、この土地愛用の出汁の素を使ったのであろう。どこの家庭でも常備している魔法の出汁があると聞いた。甘みが多少強いのがこの土地の味付けのようである。

恵ちゃんは流し場に手鍋を置き、帰ろうとする。この前の「ビヤッコナー」がやはり気になっていたもので、この前のビヤッコナー、片付いたかと、男にしては本当にデリカシーに欠ける、お節介だが話を向けてみた。

恵ちゃんは、当然ながらちよつとためらっていたが、

「ソノハナスツコナー」

「ムスメ、イエデハルドヤ」

「ナジヨシタラエガベ」

と、男親のない家庭での母娘のトラブル話を、どう聞いてやっていいのか、こちらから聞いていながら内心困った。

娘の有里に男が出来て、その男と暮らすので家を出るとの事。男は仙台の職場で知り合って、今は東京で働いていると。有里は地元の高校を出て、仙台の専門学校には行ったものの、母に一人暮らしをさせる訳にもいかず、少しの期間だけ仙台で就職したが、さっさとこの町に戻って来たのだ。薄々恵ちゃんは男の事は気づいていたらしいが、戻ってから有里は、農協がやっている苺ハウスに働き口を見つけ、すでに二年ほど経つとも言っている。

この前の連休、男に東京まで会いに行つて勝手に結婚話を決めてきた事、その報告を一方的に受けたのが、この前の歓迎会の夜だった事。そんな事があつての翌日の雪掻きでの

「ビヤッコナー」であった。それ以上男の事は詳しくは聞かなかったが、母親とすればかなりのシヨツクのようだった。

結婚話以外でも、有里は小さい頃から、半分押しつけられて出て来た盆踊りも、何であのような見世物踊りの真似をしなければならぬのよ、とも言い、なぜか関を切ったように恵ちゃんに強く反抗したと。この土地で暮らして行く事、盆踊りを支えている現場の人たちにも、世代間の意識の違いが随分ありそうだ。土地の人たちが、よそ者に面と向かって言わない、詳しく教えない事は当然の事だが、どこにでもありそうな葛藤である。

ひよっとして、晴ちゃんが意識的に紛れ込ませたのかも知れないが、西馬音内盆踊りのその変わりぶりをまとめた資料もあった。運営に関わる話は、到底よそ者には分からぬ土地柄だが、踊り手が随分と変わって来ていると。本来盆踊りは、西馬音内地区での限定さ

れた踊り手、出身者によって受け継がれて来たが、盆踊りが有名になるにつれ、今では地元ではない育成の場が出来、踊り手の住んでいる場所が県外も含めて広域化している。踊り衣装も代々の着物生地を使い、母から娘に伝え、拵えるのではなく、簡単に衣装屋で誂えてもらい、それを着て踊りに参加する踊り手も多いと。

踊り手としてはもちろん、父母を看取り、娘を一人前に育てて来た恵ちゃんもこうした地域事情に強く敏感になっているようだ。踊りもだが踊り衣装も含めてしつかりと受け継ぎ、育てて行く事の難しさを踊り手の頭的な立場となった恵ちゃんから、それとなく伺う事が出来る。

「ンダタテナア」

自分も同じような事をして来たからと、有里ばかりに、ダメだと言われないうと。晴ちゃんから少しは事情を聞いていたので、恵ちゃんの親心と揺れる胸の内は女親でなく

とも分かった。そして、恵ちゃんが意を決したように、

「デハテミニヤバ、ワガラニャンシベ」

ずっとこの土地に縛られて、思い通りに行かないと、ずっと泣きながら暮らしてもどうにもならない。やはりやってみて、その上で選べばいいと。その時こそ本当の女の出発だと。女親の優しさと割り切りの早さを感じた。

恵ちゃんが、

「センセエー、ハギイシヨシギダガア？」

盆踊りの衣装、端縫いに興味があるかとの話に、ある、あるとふたつ返事で答え、それがどうしたと聞いた。

恵ちゃんが自分の端縫いを有里に持たせたらよいか、それとも新しいものを拵えてやろうか迷っているとの事。だか、すでに恵ちゃんの気持ちは決まっていて、一人娘を男の元へ送り出す事は仕方ないとして、送り出す際に何か母親らしい事、出来る事がないのかと言う事らしい。恵ちゃんが私に話す事で、そ

の追確認をしたいと思っっているようだ。自分の端縫いを有里に持たせようと。それに母親の想いを託くす事を。

「ムスメサ、ゼツタイシヤベニヤデケレ」

「センセエー、クチカルイスベ」

と、私の胸ぐらを掴まんばかりに、きつく口止めをして来る。

少しは抱え込んだモヤモヤした気持ち晴れたのか恵ちゃんは、鍋はいつでもいい、ただ、冷蔵庫のような部屋でも、早く食べてしまつてと、腹を壊したら責任問題と言いつつ、少しずつ日没が伸びた路に出て行った。

当然ながら、男の私には分からぬ思いと言うものがある。母親の並々ならぬ苦勞を知りながら、再び母親の様な生き方をしたくない気持ちもちも分かる。そうさせたくない母親の気持ちもちも分かる。どっちにしても母親は娘を許して出すしか、送り出すしかないのであろう。恵ちゃんもそうした父母を置いてこの町を一度は出て行ったように。

それから数日後。

辺りの雪が蒼白くなり始め、ぼんやり家々に灯りがにじむ頃、夕飯を買いに例のスーパーに行く。途中、晴れちゃんの店の前を通ると、表に流れる曲になぜか引かれるものがあった。それは、正ちゃんが晴れちゃんに作ってくれた「季節めぐり」だそうだ。奥さんを亡くした晴れちゃんを元気づけようと作った曲と。

これを聞いて、ずいぶん癒やされたよとも言う。悲しみに暮れ木枯らしの冬にさまよう時も、かけがえのない思い出があれば、きっと春が訪れると。亡くなった妻が、季節の旅人となつてずっと晴れちゃんを見守り続ける、そんな曲が、せつなく、希望を抱かせる。

「ヒマデケー」

「シヨウチャンノミセツコサ、アベ」

暇を持て余していると、晴れちゃんは息子に店番を任せ、正ちゃんのスタジオを見せると、二千石橋を一緒に渡る。息子も当然のように、

そのまま呑んで帰って来る事は分かりきって
っている気配だ。

橋のたもとに二軒並ぶまんじゅう屋の先、
路地を挟んで今野洋装店がある。小綺麗に年
配向けの衣料を並べている店の奥に正ちゃん
のスタジオはあった。あいにく正ちゃんは用
事で不在だったが、音楽機器が所狭しと並べ
られたスタジオを見せてもらった。ここで曲
作りや収録をするそうだ。グループでの盆踊
りの囃子の収録は、店の中を全部使い行った
とも。東京からはるばる嫁いで来た奥さんが、
すでに土地の人となって穏やかに、嬉しそう
に説明をしてくれた。

スーパーでの夕食は買わず、また晴ちゃん
と「小春」へと直行する。相変わらず二人と
も定番の長靴である。道々、恵ちゃんから端
縫いに興味があるか聞かれたが、随分古くか
らあるのかどうか聞いてみる。

「オベダフリコエデダノモ」

よく聞いてくれた、覚えた振りをするけれどと晴ちゃんが言う。実のところ晴ちゃんは、藍と端縫いまつりの実行委員会の会長なのだそう。このまつりは、より多くの人々に、西馬音内盆踊りの魅力と踊り衣装にちなんだ歴史と文化、そして藍と端縫いの魅力を発見してもらうために、毎年八月初旬に行っていると。踊り衣装を持つ家々が、着物の虫干しも兼ねて、それぞれが趣向をこらして衣装を展示すると言う。

「小春」はまだ開店前であったが、小春おばさんを前にカウンターに席を得た。奥のガラス棚は、今ではあまり呑む事のないウイスキーなど懐かしい銘柄が並び、若い頃の女主人と仲間たちが一緒に写真が飾ってある。ご多分に漏れず仲間たちのマドンナなのだ。

「センセェー、ソバシヨウチュウノングスカ」

地元で穫れたそば粉で作った焼酎を呑もう

と晴ちゃんに勧められる。この町には結構蕎麦屋が多いが、ここで穫れた蕎麦粉を使っている店は残念ながら少ないとも言える。秋田でも蕎麦の収穫量は近年結構増えて来ていると。

「エガベガ、ツヅキ」

そして、先ほどの端縫いの話を続ける。西馬音内盆踊りの衣装は、昭和十年四月の第九回全国郷土舞蹈民謡大会に秋田県からの推薦で、東北代表として出演が決まった時大きく変わり、現在に受け継がれていると。その時、踊り衣装が揃えられ、端縫い衣装も舞台衣装として工夫されたと言う。踊り手は踊りだけではなく、自分たちの踊り浴衣を作る絞り染めの方法も細かく指導もされた。それまでどちらかと言うと即興的な振りが主になっていたのを、出演女子青年団の踊り手を中心に、優雅で艶やかな振り付けに整えられて行った。同じように雛子方の衣装も藍染めの浴衣を着用するようになったと、実行委員会の会長ならではのお話である。

脇で手持ちぶきたに聞く小春おばさんが、

「アバノハナスツコモ、キグスカ」

さすが女主人、衣装の事となれば晴ちゃんを負かすうんちくのようなのである。

端縫いは、四、五種類もの絹布をはぎ合わせ、黒布で縁取り、絹の色柄を左右対称に配色するのが基本と言う。帯もしぶ味好みのものが多く、結び方は御殿女中風な形とし、その上に赤か紫・黄のしごきを締め、蝶結びにして、左側に下げると。いわば、端縫いは西馬音内のおなごの心義だと。だから生半可な気持ちで着られない。大勢の観客の目にふれる踊り衣裳に、西馬音内おなごたちが強い関心と工夫をもって、絹の端布を愛おしみ、思い思いに図柄や配色に苦心をしながら端縫い衣裳を縫いあげて来た。

そして端縫いは、祖母から母へ、そして娘へと受け渡すものだが、昭和中頃までは絹を使った衣裳はよほどの旧家などしか持っていなかった。さらに、おなごとして成熟した心

身が踊りに表れ、魅了するような踊り手であれば、着る事が出来なかったもの、許してはもらえなかったとも言おう。

小春おばさんの講釈が終わる頃、すでに晴ちゃんは立ち上がって、おはこの曲を歌い出している。役場の勤め帰りの客二人がカウンターの背後に座り、仕事話をする。やはり、まだまだ話している事が聴き取れない、分からないコトバである。しきりに町の活性化について議論しているようでもある。

「ヤー、イダツスナ」

「センセエー、ワリガタンシナー」

留守だった正ちゃんが、追い掛けるようにして店に顔を出す。観光物産協会の会長でもある正ちゃんも、この頃スケジュールが多忙のようだ。

「ハズカシ、エフリコギダ」

と、スタジオを訪れた事に、こんな事もやっていますと言う風な、正ちゃん風のはにかみ

と誇りが入り混じったコトバである。

途中からは、背後の役場職員とも入り乱れ、この小さな町の活性化を、お互い唾を飛ばしあう激論となった。

「ユキノエキ、イツスナ」

正ちゃんが役場で計画している道の駅の構想について、その名称についてこの町らしいものだと言う。冬場はもちろんであるが、どうしても働く場所や地域を元気にする取り組みが少ないと。西馬音内盆踊りを活かしながら、もっとこの土地の産物や加工品を売り出して行ける拠点としての雪の駅らしい。

その話を聞きながら、かつて雄勝電鉄の西馬音内駅が、この土地の人々と旅人が行き交う場所であったように、交通手段が大きく変化した中で、町外と町なかを結ぶ結節点としての新たな駅なのではと思った。かつて多くの人が都会を目指し西馬音内駅から発って行ったが、今度は雪の駅を目指し観光客が訪れ、そこから町なかや周りの豊かな歴史と自然に

触れる、口には出さなかったがそんな事になればと、異邦人でありながら願った。

初めて呑んだ蕎麦焼酎だが、さほど今日は酔いが回らない。それをいい事に、正ちゃん、晴ちゃんと片を組み二軒目へはしごする。いともながら太刀打ち出来ないタフな仲間である。その後は当然のように、記憶にない。

短い二月の晦日。

閏年ではないので二十八日で終わる。西山に沈む陽がことのほか強くなって来たような気もする。あと二十日程で春分なのだから。

この小さな雪の町に、少しばかりの荷物を解いて三週間程が経つ。雪を観たかったのか、雪に埋もれて、何かを隠してみたかったのか。いまだ何も分かったものはない。ただ、仲間が用意してくれた暮らしは、何も無いが、充分過ぎるほど満ち足りたものだった。

この土地に長く住まないと到底分らないような話であるが、この雪の町から逃げ出し

たい、思いにかき立てられる時も確かにあるようだ。私に見せる仲間のいつもの素振りとは違う、私がセンセエーと呼ばれるのと同様、他者によってのみ形づくられるイメージの中でいつも葛藤しているのだ。艶やかで幻想的な西馬音内盆踊りしかり、お伽噺のような雪深い小さな町しかり、秋田の固定化されつつある土地のイメージも。

しかし、その他者が持つ、与えるイメージだけに翻弄されない、仲間の地道な活動があり、雪をはね除け楽しむ町があり、長い年月を経ても変えない、動じない秋田の暮らしもある。良い事悪い事、すべてそれらを包み、許せるだけの土地の人の温もりや、昔から馴れ親しんで来た風景、野山の味、長い間の食文化がある事を教わった。少しずつだが、この土地の味とコトバに慣れ、なぜか恋しくさえる思うように、心持ちが動めく。

「センセイ、いますか」

いつもの女とは違う、土地のコトバラしくない若い声が玄関先です。センセイと呼ぶには物売りでもなからうと、いつものように気合いを入れ玄関戸を開けた。恵子の娘・有里であった。顔は何となく覚えていたが、直接話すのは初めてである。何となく、顔立ちが恵ちゃんに似ている。そうか、恵ちゃんの若い時なのかと、有里を前に夢想してしまう。

「センセイの明日の予定は、どうですか」と聞いて来る。当然ながら予定など入っていない。ただ、逃げる、いや旅支度をそろそろしなればと思っているくらいの話だ。

「明日、良かったら苺狩りに行きませんか？」
有里が働いている苺園が明日三月一日から開園すると言う。今日付けで退職したのだが、せっかくだから私に苺狩りを体験させてあげたいと言う。おそらく、恵ちゃんが気を利かせた指図なのだろう。

「それじゃ、明日十時に迎えに来ますから」と、言い残し有里は帰って行った。手鍋も借

りっぱなしの状態で、母娘のその後の話は恵ちゃんから聞いていないが、母娘とも折り合いがついたのである。間もなく有里は男の待つ都会へと発って行くのだ。

三月、気持ちのいい朝を迎えた。

有里の運転する軽乗用車で、二年余り通ったと言う苺園に向かった。東方に真っ直ぐな道、やはりどうして誘ったのか理由を聞いた。

「この前のお詫び。朝からセンセイを叩き起こそうとしたことの」

どうやら、あの時の玄関戸を叩く音は、有里だったらしい。朝方、言い合いとなった母親とは居られなくなり、とっさに表に飛び出したのはいいが、どこへも行く宛てもなく、玄関戸を叩いたらしいのだ。母親のグループのメンバーに潜り込んだら、あっという間に狭い町中の噂話になることも嫌って。

「センセイ、朝帰りだったそうね」

「いくら叩いても分からないですよね」

大変な思いを、辛い思いを有里にさせてしまった。ただ、かえってその方が、母娘には良かったのかも知れない。どこへ逃げても、逃れ切れる事も出来ない、所詮血のつながった母娘なのだ。逃げたって後が大変だよ。おじさんだってそうなんだからと、有里に理由の分からぬ返答を試してみた。

広い圃場の中にカントリーエレベーターがそびえ立つ。その周囲にガラス張りのハウスが複数棟建つ。まだまだ道端の雪は背丈近くあるが、ところどころに土色をした部分も覗く。雪解けが一気に早まる気配だ。

「今日は特別サービス。私のおごり」

「さあ、センセイ入って」

ハウスの手前の喫茶コーナーを有里の顔パスで通り抜け、ハウスの中に後ろから押し込まれるように案内される。中は多少ムツとするほど、温度も湿度も高い。まるで工場のような栽培機器が整然と並び、苺が規則的なポ

ツトから生え、垂れ下がっている。三、四階もあるう高いガラスシェルターの向こう、雲が吹かれて行く。温室の中段で、日除け調節のネットがバタバタ音を立てる。

「ここの苺、真っ赤でしょ」

苺は「とちおとめ」と「べにおとめ」があり、大粒の苺がこのハウスの売りとの事だ。とちおとめは、酸味が少なく甘みがあり、日持ちがするようだ。べにほっぺは、最近品種登録された苺で、なかなかの貴重品のようで、円錐形の大粒で食感もよくみずみずしく、他の苺とは一線を画すとか。渡されたポリ容器を手にとって、葉の下に長く垂れ下がる茎の先、苺を色を探る。どれが美味いか、どのようにして苺をもぐか教えてくれる。

「センセイ、これ食べてみて」

大ぶりの苺を私の口元に突き出す。口に含むと本当に甘い。じゅわりと、みずみずしさと香りが口の中を抜けて漂う。

「じゃ、私も一つ」

と有里も口に含みながら、ふざけ加減で笑顔を私に突き出す。その口元がおいしきで赤く揺れた。年甲斐もなくどきつとした。

「センセイ、母のこと、どう思う？」

突然の連続パンチを私に食らわす有様である。有里がこの町を離れる事で、母親を一人にして置く事が心細くなったのだろうか。

「センセイも戻る、帰らねばならない場所ありそうだから。無理難題は言いませんね」

有里の言う通りである。小さな町、仲間との居心地良い話の中で、いつまでも閉じこもっている事も出来ぬ。どこか有里同様、この先の事を考え、生きてゆかねばならないのも現実である。もう、盆踊りは踊らないのかと、盆踊りは嫌いだと言う有里に話を向けた。

「本当のこと、今は分からない」

「ただ、母には悪いけれど、母のような生き方を絶対したくない」

少し強ばった口調で答えてみせたが、

「だけど、お盆に帰って来られるものなら、

もう一度踊ってもいいかな。母のような端縫いを着て。センセイ、わがままかな？」

有里には端縫いの事はもちろん語れない。そつと恵ちゃんが端縫いを、旅立ちの荷物に忍ばせて送り出す事を。しかし、これで良いのだ、これで母娘の思いが、途切れずどこかで繋がっているのだと確信を覚えた。端縫いが左右対称の仕立てのように、母娘もきつと二つ折りの似たもの同士、それがゆえの激しいぶつかり合い、葛藤なのだとも。

「センセイ、いちごって草冠に母ですよね」

さらに有里が聞いてくる。そして、すでにその意味も自分で分かっているようで、「昔、大蛇に生まれた子を襲われた女は半狂乱になって返せと叫び、十年叫び続けたある時、口から真っ赤な血の塊が飛び出し、その血の叫びが見事大蛇を撃ち果たし、わが子を取り戻した」と、この話に由来して、草かんむりに母と書いて「いちご」と読ませるようになった。有里は、母親・恵ちゃんの事も、すで

に宿しているかも知れない新たな命の事も、
想い感じて聞いているのかも知れない。

葎ハウスの表、西方の丘陵、仙道や田代が
ある方向、三角形の鳥海山が見える。ここに
も容姿は違うが、奥羽山脈のようなシンボル
の山がある。それをみんなが誇りに思い、拠
り所にして生きている。有里という名も誰が
付けたのか聞いていないが、きつと戻るふる
さとが有る事を、どんな時でも帰れる場所が
ある事を名前に託したのだろう。

昔、多くの娘たちがこの雪深い土地から無
理矢理剥がされるように売られて行き、二度
と帰れなかった無念さを思うと、有里は帰れ
るふるさとがある事をとつくに分かっている
のだろう。思いがけず有里が土地コトバで、

「マンツ、イチゴイチエデヤナ」

「センセエー、ビギナーズラック、ダスナ」

冬場はほとんどその姿を見せないと言う鳥
海山が、有里と私の遠く先に輝いて見せる。